

社会的疾患

——映画『ジョーカー』を通じた疾患の再解釈——

宮本元気

猟奇的なピエロとして有名な映画『ジョーカー』(2019)では、スーツを着たジョーカーであるアーサーは、薬物療法とカウンセラーのアセスメントによって治療を受けている精神疾患患者として描かれている。しかし終盤になるとおよそ社会的とは到底いえない猟奇的な行為によって犯罪行為を繰り返すダークヒーローへと変容していく。ジョーカーを精神疾患であるかどうかについて、現代社会の多様性に焦点の比重を置く社会学からの視点で表現するなら、彼もまた個性を持った一人の社会的人間である。

もし彼を正常ではなく社会規範から逸脱した人間であると表現したいのであれば「社会的疾患」という造語を彼に当てはめる。この言葉は、これまでの環境及び現在の社会的環境として「その状態が続くと社会的精神的に不衛生となる」状況下で生活を余儀なくされている人間を指す言葉として定義する。本稿で造語として使用する「社会的疾患」についての説明と考察を深めながら、彼のような立場にある人間を少しでも社会的に健全な環境に引き戻すことができる可能性について、分析を行う。具体的に、まずは映画『ジョーカー』の興行的成功やプロモーションによる動員率を分析したのちに、古典的論文である Goffman (1959) や Foucault (1975) や宮地 (2012) や中河 (2006) のような研究者の研究を援用しながら、社会学的視点から精神疾患という言葉の再解釈する。また、社会的疾患という言葉に定義する試みを行う。

また、現代のこのころに関する諸問題が医学的処置のみならず社会政策・福祉問題やこれまでの価値観・メディアが市民にもたらす影響について、映画『ジョーカー』を通じて考察したのちに、日本におけるマスメディアの報道が社会福祉に悪影響を及ぼす事例について示唆する。